

フーベルト・リッターのジードルンク・ルントリンクに見る 住棟と住戸平面の関係性

海老澤 模奈人^{*1}

A study on the housing estate *Rundling* by Hubert Ritter: focusing on the relationship between the arrangement of residential buildings and dwelling unit plans

Monado EBISAWA^{*1}

This paper discusses the housing estate *Rundling* constructed in Leipzig in 1929-30, focusing on the relationship between the arrangement of residential buildings and dwelling unit plans. German architect Hubert Ritter designed the housing estate *Rundling* as triple circular rings consisting of twenty-four arc-like residential buildings. He adopted this distinctive arrangement in consideration of the raised ground in Leipzig-Lößnig. In order to ensure good residential condition in the circular buildings, Ritter planned various dwelling unit with careful consideration of the relationship to direction. Though the details of Ritters' planning in these buildings had not been revealed until today, this study attempted to present sixteen types of dwelling unit plans of housing estate *Rundling* by searching and analyzing historical drawings housed in the Leipzig city archive. So, the housing estate *Rundling* is one the prominent examples of the housing estates during Weimar period, not only because of its unconventional arrangement of residential buildings, but also its variety of dwelling unit plans.

1. はじめに

旧東ドイツの主要都市ライプツィヒの郊外に、円環状の住棟配置をもつジードルンク（住宅団地）がある。建築家フーベルト・リッター（Hubert Ritter: 1886-1967）の設計で1929-30年にライプツィヒ市によって建設されたジードルンク・ルントリンク（以下、「ルントリンク」とも呼ぶ）である。円弧形平面の24棟の住棟が三重の円を構成する（図1）。ヴァイマル共和国時代のドイツで建設されたジードルンクの中にはこのように幾何学的な住棟の配置を示す例がしばしば見られるが、その中でもルントリンクは、幾何学形状の徹底という点で際立つものである。

ジードルンク・ルントリンクの三重の円の中心には住棟に囲まれた円形の広場がある。建築史家ヴィンフリート・ネルディンガーはルントリンクを評価する際に、このジードルンクと同様に住棟に囲まれた幾何学形の広場をもつ

ジードルンクの例として、カール・シュナイダー設計のハンプルクのヤレシュタット（1926-29年）（図2）を引き合いに出している。ヤレシュタットでは1辺100mの正方形広場を囲う全住戸に水平の帯のようにバルコニーが設けられ、それを通して住人たちの意識が広場という共有の中心点へと向けられる。それはヴァイマル共和国で求められた「新しい共同社会（Gemeinschaft）の追求のための建築的シンボル」の一つの形であり、ジードルンク・ルントリンクも同様の例として挙げられるという²⁾。

ただしこの評価は論者によって変わり、例えばゲルト・ケーラーは、ルントリンクの中央の「何もない」円形広場を指して、「共同体のための外部空間の真の提案というよ



図1 ジードルンク・ルントリンク鳥瞰写真（1930年）



図2 ヤレシュタット鳥瞰写真（1930年頃）

^{*1} 東京工芸大学工学部建築学科教授
2018年9月25日 受理

りも、空虚な見せかけ (Geste) として見るべき」と断じている³⁾。ルントリンクの幾何学的でシンボリックな計画には賛否両論があることがわかるが、筆者がここで注目したいのはネルディングーの続く指摘である。彼は、ヤレシュタットやルントリンクと同様に、住棟によって囲い込まれた中心的な空間をもつジードルンクのもう一つの例として、ブルーノ・タウト設計のベルリンのジードルンク・ブリッツの馬蹄形住棟 (1925-27) (図3) にも言及した上で、ジードルンク・ルントリンクの計画の意義について次のように述べる。

「ヴァイマル共和国で建設された他の象徴的・幾何学的な配置をもつ住宅地と比べたときの H. リッターのルントリンクの特別な意義は、彼が 11 の異なる住戸平面を發展させ、それによって住戸の方位の問題を克服し、結果として、方位に関して問題が生まれがちな円形の配置に、矛盾を生じさせなかったことである⁴⁾」。

本稿では、このネルディングーの指摘にあるように、ジードルンク・ルントリンクの計画において、円環状の住棟という極めてシンボリックな建築を実現するために、設計者リッターが取り組んだ特徴的な住戸平面の計画に注目したい。それがヴァイマル期ドイツのジードルンク建設における建築家たちの取り組みの幅の広さを示すものになると考えるからである。

ネルディングーは、上記のようにルントリンクを評価しつつも、計画された住戸平面の数を述べただけで、その詳細については触れていない。このジードルンクに関する先行研究としては、管見の限りでは、リアネ・シャーフの論文⁵⁾がもっとも広範なものと考えられる。同論文ではルントリンクの建築の特徴が広く論じられているが、そこでもネルディングー同様、ジードルンクに「11 の異なる平面が用いられている⁶⁾」ことには触れるものの、その具体的な分析はなされない。他の著者によるルントリンクに関する記述でも、住戸平面の多様さはたいてい指摘されるものの、その実態について具体的な分析を行っている例はない。リッター自身も、後述するように建設後に発表した雑誌記事の中で一部の住戸平面のタイプを例示するが、平面タイプの総数とその全容は示さなかった。

筆者はライプツィヒ市史料館で、ルントリンクの設計図



図3 ジードルンク・ブリッツ鳥瞰写真 (1927 年)

面を閲覧し、計画された住戸平面についての情報を得た。本稿ではその成果をもとに、このジードルンクにおいて、円形の住棟配置との関係で実際に何種類の、どのような特徴をもつ住戸平面が提案されていたのかを明らかにする⁷⁾。さらにその結果を踏まえて、ヴァイマル期ドイツのジードルンク計画の中でのジードルンク・ルントリンクの特徴を考えたい。

論文の構成は次のとおりである。まず第2章で、日本ではほとんど語られない建築家フーベルト・リッターについて論じる。続く第3章ではジードルンク・ルントリンクの成立と建築の特徴を述べる。そして第4章において計画された住戸平面の実態を明らかにし、その特徴を考察する。なお、本稿は筆者が取り組むヴァイマル期ドイツのジードルンク研究の一部である。筆者による他のケーススタディ⁸⁾と同様に、ジードルンクの建設後の変遷を終章で補足している。

2. 設計者フーベルト・リッターについて⁹⁾

フーベルト・リッターは1886年5月17日にドイツのニュルンベルクで生まれた。祖父と父が画家という芸術と縁の深い家庭であった。しかしリッターが2歳のときに父が他界し、母は子供たちとともにミュンヘンに移住した。ミュンヘンのギムナジウムを卒業した後、リッターはミュンヘン工科大学に入学し、建築を学び始める。大学では特にルネサンス建築の講義を講じたフリードリヒ・フォン・ティアシュ (1852-1921) から強い影響を受け、1909年の卒業後はフランクフルト・アム・マインの彼の設計事務所で一時期働くことになる。そこで彼は、後にフランクフルトで数多くのジードルンクの建設を手がけるエルンスト・マイ (1886-1970) と同僚になった。リッターはこの事務所でティアシュの代表作であるフランクフルトの大ホール (Festhalle) や、ヴィースバーデンのクアハウスの改築計画などにかかわった。

1912年に国家試験に合格し、行政建築家 (Regierungsbaumeister) の資格を得ると、翌1913年夏には27歳の若さでケルン市の建築家 (Stadtbaumeister) に任用された。ケルンでの初期の仕事は市の建築物の維持・修理に関するものであり、歴史的な集会場や市庁舎の改修計画を担当した。そのときに後のケルン市長 (1917-33) であり第二次世界大戦後西ドイツ初代首相 (1949-63) となるコンラート・アデナウアー (1876-1967) の知遇を得、第一次世界大戦中に彼から、「スペイン棟 (Spanischer Bau)」と呼ばれる歴史的な市庁舎建築の議場の設計を任されている (1921年竣工)。第一次世界大戦後の1920年代初頭には、敗戦により失われた学校建築の計画や、ケルン市の都市計画設計競技の事前審査に携わった。その設計競技の勝者となったハンプルクの建築家フリッツ・シューマッハー (1869-1947) とは、この仕事を機縁に親交を深めている¹⁰⁾。

1924年、ライプツィヒ市の建設局長 (Stadtbaurat) の公募に応募したリッターは、87人の中からその職に選ばれ

た。ジェームズ・ビューリンク (1871-1936) の後任として、彼は 1924 年 11 月にライプツィヒに赴任した。当時のライプツィヒは約 70 万人が住む中部ドイツ有数の都市であり、見本市の開催都市、産業都市として 19 世紀末より大きな発展を見せていた。1930 年まで建設局長を務めたライプツィヒでの彼の仕事は、都市計画から個々の建築設計まで多岐に渡った。

彼に求められた主要な仕事の一つに、ライプツィヒ市全域の総合建設計画 (Generalbebauungsplan) の策定があった。これは在任中を通して準備され、1929 年に発表されている。彼の都市計画の中に「リングシティ (Ringcity)」という都市中心部に対する提案がある (図 4)。1927 年に最初に公表されたこの計画は、市中心部の歴史的な街区を維持し、その周囲にかつての市壁のように 8 階建ての高層建築による環状街区を作る提案であった。当時のライプツィヒ市は、見本市への訪問者が年々増え続け、街中の事務所・商店の需要は高まる一方であり、そのための新たな事務所空間をこの環状街区において供給しようとした。旧市街を取り囲む環状の構造は、中央駅とも接続し、市内の円滑な交通にも有利なものとされた。リッターはこの都市計画案の説明の中で、パリの歴史地区を近代的高層建築で置き換えようとしたル・コルビュジエのプラン・ヴォワザン (1925 年) を批判的に参照し、パリやライプツィヒのような歴史的な街において歴史的・文化的価値のある都市中心部を守ることの重要性を訴えている¹¹⁾。彼の都市、建築に対するスタンスを示すものとして注目されよう。また、ここでの環状構造は、後に設計されるジードルンク・ルントリンクとの形態的な関連性もうかがわせる。

他方で、この提案からもわかるように、リッターは高層の建築にも可能性を見ていた。例えばライプツィヒ中央駅に隣接する見本市ホテルを高層建築で提案している (1927 年、実現せず)。彼はまた、市の東部に連続する緑のゾーンを計画するなど、都市への緑地の導入も重要視した。これはケルンで知己を得たフリッツ・シューマッハーからの影響と指摘されている¹²⁾。自身の経験をもとに歴史的な街並みの保存や緑地を重視する姿勢を示す一方で、高層建築など新しい動向を取り入れることにも熱心であった。

ジードルンクとの関連では、1927 年 3 月にライプツィヒで開催された「ジードルンク週間」を準備したことが特

筆される。これはベルリン、ハンブルク、ケルンなどのドイツ都市にアムステルダム、ウィーン、チューリヒ、ロンドンなどの他国の主要都市も加わった、住宅やジードルンクに関する国際的な意見交換の場であった。リッターはこのイベントの主催者として、先述の「リングシティ」計画やライプツィヒの住宅建設状況について発表している¹³⁾。

当時のドイツで住宅建設の経済性を検討する国家的な研究機関であった「建設及び住宅の経済性に関する国立研究協会 (Reichsforschungsgesellschaft für die Wirtschaftlichkeit im Bau- und Wohnungswesen)」のメンバーとしての活動も付記しておきたい。そこで彼はヴァルター・グロピウスらとともに「鉄骨建築」の委員会に属した。当時ライプツィヒの住宅建設でも、リッターのもとで新たな建築構造が部分的に試みられたとされる¹⁴⁾。しかし実際には、ルントリンクをはじめとしたこの時期のライプツィヒの住棟の多くは煉瓦を用いた組積造であった。鉄骨や鉄筋コンクリートなどの新たな構造技術はまだ実験段階であり、むしろ住棟のデザインや配置計画、住戸の平面計画において、リッターの独自性は実現していったと考えられる。

住宅建築以外にも建設局長在任中に、グラッシ美術館新館 (1925-29)、大市場 (1927-29)、西屋内水泳場 (1925-26)、マックス・クリンガー学校 (1928) などを設計し、ライプツィヒ市の都市基盤施設の整備に貢献した。また、1927 年から取り組んだ大学病院地区の総合計画では、伝染病病棟 (1929-30) などが実際に建設され、ライプツィヒの発展に都市的スケールで影響を与えた¹⁵⁾。

1930 年 11 月、建設局長の再任を求めたリッターであったが、ドイツ共産党、ドイツ社会民主党、国家社会主義ドイツ労働者党の反対を受け、選挙で敗れてしまう。特に国家社会主義ドイツ労働者党 (ナチ党) は、リッター在任中の建設予算の浪費を非難するキャンペーンを展開したという。そこには、彼の数々の建築作品と並んでジードルンク・ルントリンクを批判する言葉も連ねられていた。すなわち、「レスニヒのルントリンクのばかげた考えに莫大な費用を浪費している¹⁶⁾」と。

建設局長退任後、リッターは建築家としてライプツィヒで活動した。病院設計の経験を生かして、1932 年には『現代の病院建築 (Der Krankenhausbau der Gegenwart)』を著し、ハノーファー工科大学から博士号を授与されている。同書は第 3 版 (1953 年) まで版を重ねた。以後彼は病院建築の専門家として、多くの病院の計画に携わる。戦時中は現ポーランドのクラクフやルクセンブルクの総合建設計画にもかかわるが、ライプツィヒの公職に戻ることはなかった。第二次世界大戦後はライプツィヒ市の再建のために再び公職を求めたが、市当局から認められず、個人の建築家としてしばらく大学病院地区の再建計画などに取り組んだ後、1952 年 10 月に故郷ミュンヘンに戻った。ミュンヘンではミュンヘン工科大学を卒業した息子のハンス・リッターと協働しながら、各地の病院計画を中心に設計を行った。そして 1967 年 5 月 25 日、フーベルト・リッターは 81 歳で生涯を閉じた。

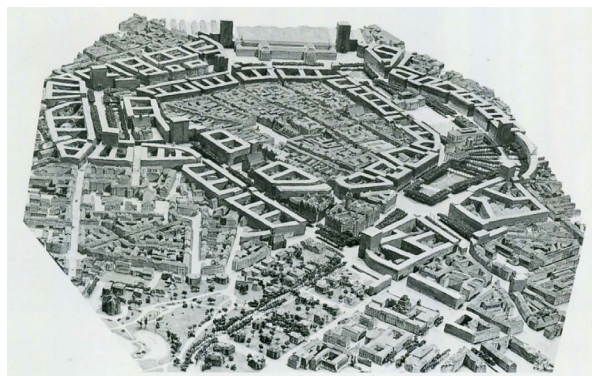


図 4 「リングシティ」(模型写真) (1927 年)

3. ジードルンク・ルントリンクの成立

3-1. 1920年代ライプツィヒにおける住宅建設

先述したようにライプツィヒは19世紀末から20世紀にかけて急速に発展した中部ドイツの中心都市であった。ドイツ帝国が成立した1871年から第一次世界大戦が勃発した1914年までの間に、市域を拡張しながら、同市の人口は約10万人から60万人超に増加している。その時点でベルリン、ハンブルク、ミュンヘンに次いでドイツ国内で第4の都市となった¹⁷⁾。第一次世界大戦後は多くのドイツ都市の例に漏れず、ライプツィヒでも住宅不足の解消が喫緊の課題となった。ある資料によれば、1919年における同市の住宅不足数は約13,300戸だったとされる¹⁸⁾。戦後の混乱が続くこの時期、ライプツィヒでは他都市と同様に市や建設協同組合（Baugenossenschaft）が主な住宅供給主体となった¹⁹⁾。1918年から1933年の間に同市では約25,000戸の住宅が建設されたとされる²⁰⁾。

よく知られるように20世紀初めのドイツの住宅地の建設には、19-20世紀転換期に英国で成立した田園都市運動が大きな影響を与えていた。前任のビューリンクの時代（1915-24）には、ライプツィヒでも低層庭付きの「一大家族用住宅²¹⁾」を主体とした、いわゆる田園都市的なジードルンクの理想が追求されていた。しかしリッターが建設局長に着任した1920年代半ば以降、住宅供給を加速させるために、より効率の良い多層住棟の建設にシフトしていった²²⁾。1924年に導入された家賃税による財源的恩恵を受け、1920年代後半には住宅の建設数が増加した。先行研究によれば、リッターは在任中に約8000戸の市の住宅建設に携わったとされる²³⁾。このライプツィヒの例からもわかるように、1920年代後半は一般に、両大戦間期のドイツで住宅建設数をもっとも増大した時代であった。しかし1929年に起こった世界経済恐慌の結果、1930年代に入ると住宅建設数は減少し、簡素な建築が優先されるようになっていく。1920年代終盤に建設されたジードルンク・ルントリンクは、住宅建設にまだ勢いがあった時代のライプツィヒにおける一つのプロジェクトだった。

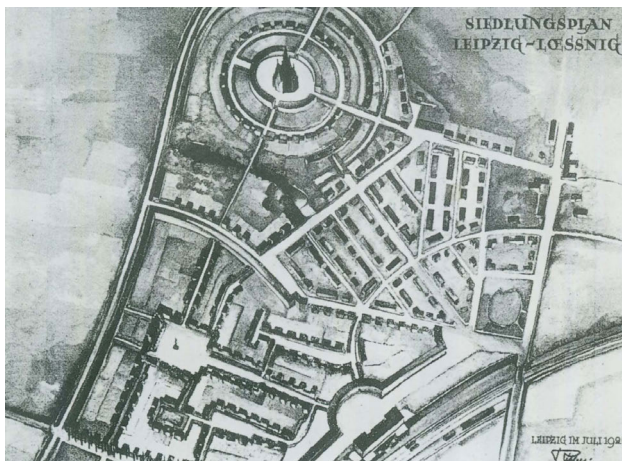


図5 ジードルンク・ルントリンク事前計画案（1926年）

3-2. ジードルンク・ルントリンクの成立²⁴⁾

ルントリンクが建つのは、ライプツィヒ市中心部から南方約5kmに位置するレスニヒ（Löbzig）と呼ばれる郊外地である。レスニヒは1891年にライプツィヒ市域に編入された地区であり²⁵⁾、緑の多い自然環境豊かな土地であった。この地にはすでにアルト・レスニヒという大規模な住宅地が1902-12年に建設されていた。その南東側の緩やかな起伏をもつ土地にジードルンク・ルントリンクは計画された。リッターは1924年の建設局長着任後、総合建設計画策定のために市域全体、約409km²の航空写真を撮影させたとされる²⁶⁾。ルントリンクの敷地の特性もこのときに把握したと考えられる。

1926年7月にはこのジードルンクの事前計画案（第1案）（図5）が作成されている。鳥瞰図として描かれたこの計画案を見ると、手前にアルト・レスニヒの既存の住宅地が広がり、その奥の高台に複数の建物が円形に配置されている。これがジードルンク・ルントリンクの最初の形である。実現した三重の円環ではなく、二重の円環に加えて、最外部は半円となっている。内側の円が4つの円弧状の建物から構成されている点は実現した形と同じだが、その外側の2番目の円環が29の小規模な、長さの短い住棟から構成されている点の実現と異なる。興味深いのは中央の円形広場の中心にゴシック様式風の尖塔をもつ教会が建っていることである。広場に教会が建つことで、住宅地という共同体の中心点が強調されているのである。

この初期案についてのリッターの言葉は残されていないため、ここで教会を計画した経緯は不明である。ネルディングーは、リッターのこの教会と、ブルーノ・タウトが自身の理想的な都市計画案の中心に象徴的な建物として提案した「都市の冠」とのつながりに触れている²⁷⁾。ここではさらに、ドイツのジードルンクに影響を与えた英国の実践との関連性も示唆してみたい。例えばロンドン郊外にバリー・パーカーとレイモンド・アンウィンの設計で建設されたハムステッド田園郊外（1905～）では高台の中央広場に二つの教会（自由教会とセント・ジュード教会、とも



図6 ハムステッド田園郊外（ロンドン）のセントラル・スクエアに建つセント・ジュード教会（2017年8月撮影）

にエドウィン・ラッチェンス設計) が建ち、住宅地の中心をシンボリックに形成している(図6)。そのような英国の先例がリッターの初期案にインスピレーションを与えた面があるかもしれない。

しかし、同じ年に作成されたレスニヒ地区の建設計画案を見ると、広場の中心の教会はなくなり、塔状の小さなモニュメントに代わっている(図7)。この第2案では円環状の住棟は実現したものと同様に三重になった。ただ、中央の円形広場への入口が門ようになって、広場が閉じた空間として表現されている点は最終形と異なる。その一方で外側の二つの円環は、前案同様に小規模な住棟から形成されている。住棟ごとに背後に庭が伸びていることから、これらの住棟群は、庭付きのテラスハウス形式が想定されていたのかもしれない。最終的には次節で述べるように、3〜4階建ての24の円弧形の住棟による三重円としてルントリンクは1929-30年に建設される。

なお「ルントリンク」という名称は、すでに1927年の時点で関係者内で用いられていたとされる²⁸⁾。リッターも竣工後の記事の中で、ライプツィヒ市民がじきに口々にそう呼ぶようになったと記している²⁹⁾。「ルントリンク」とは、元来、ライプツィヒの北西部に点在する、スラブ民族による独特な環状集落を指す言葉であった。そのような地方特有の集落の形状との類似性から、このジードルンクの計画に対して「ルントリンク」という呼び名が用いられ、後に定着したのだろう。

スラブ民族の環状集落ルントリンクについては、長谷川章氏のブルーノ・タウト研究の中で詳細に論じられている³⁰⁾。同書の説明と写真によれば、環状集落ルントリンクでは、戸建ての農家が丸い広場を取り囲むように環状に配列される。中央の広場は、コンパスで描いたような正確な円ではないものの、各住宅が妻壁を広場の中心に向けて放射状に配置されることで、結果として円に近い形になっている。確かにジードルンク・ルントリンクに通じるが、両者の相違点も目に付く。挙げられるのが、戸建の独立住宅と集合住宅の違いである。独立住宅によるスラブ民族のルントリンクの構成は、むしろリッターの1926年の2つの計

画案(図5,7)に見られた、住棟が小規模に分割された最初の姿に近いように見える。そう考えると、ルントリンクの初期の計画にあった、スラブの環状集落に通じるような土着的、個別的な色彩が薄められ、近代建築の抽象的かつ集団的な造形に変換されていく過程が、ジードルンク・ルントリンクの成立過程と見なすことができるかもしれない。

3-3. ジードルンク・ルントリンクの建築の特徴

ジードルンク・ルントリンクの一番の特徴は24の住棟が三重の同心円を形成する住棟の形状にあるといえる。竣工後、リッターがこのジードルンクについて説明した竣工記事の文章をもとに、この住棟計画の根拠を述べたい³¹⁾。

リッターによれば、ライプツィヒの土地の特徴は、平地の広がるところにあり、河川の周辺のみわずかな土地の起伏が見られるという。そのように平地が主となる土地の特徴はライプツィヒ市の住宅建設にも影響を与えてきた。かつては街区を囲うタイプの住棟が一般的であったが、現在は南北に伸びる住棟を平行に並べた「ツァイレンバウ(Zeilenbau)」と呼ばれる平行配置型の住棟がジードルンクの計画に用いられるようになってきたという。しかしその結果として、住宅地の計画が単調になる危険が生じている。その問題をなくすために、事前の都市計画的な作業が重要であり、土地形状に変化があり、平行配置型住棟が経済的・美的に好ましくない場所では、土地の変化を考慮した建築の形状が探求されると、彼は述べる。

続いてリッターは、ルントリンクの説明に移る。

「昨年建設が決まった市南部の土地のわずかな起伏は、平行に曲線を描く等高線に沿って、住宅を求心的な円として配置するきっかけを与えた。この方法により道路を比較的少ないコストで実現し、建設に際して土地の動きの魅力を高めることが可能になった。土地の膨らみを強調するために、低いところにある円は2階建てか3階建てとし、内側

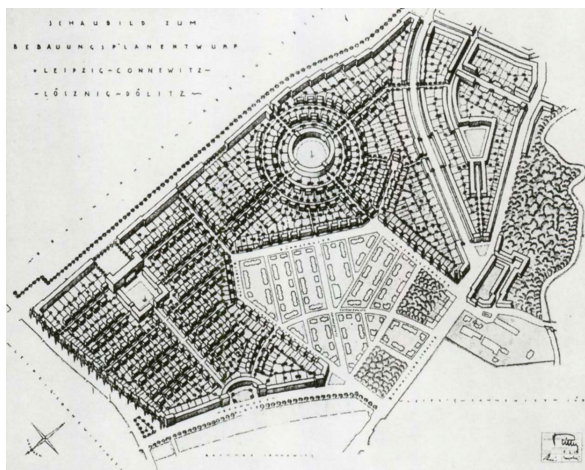


図7 レスニヒ地区の総合建設計画(1926年)

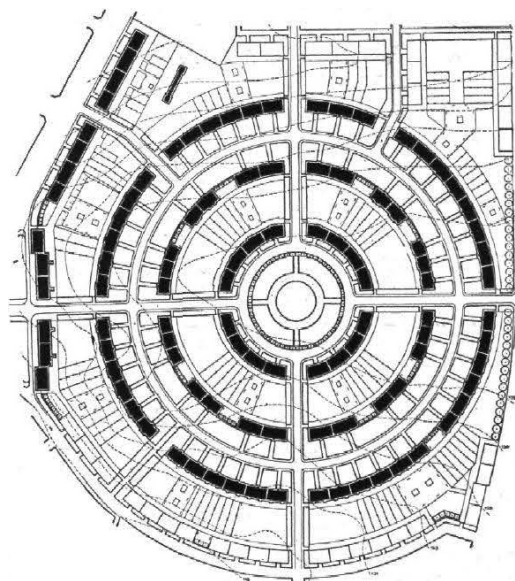


図8 ジードルンク・ルントリンク配置図(北が上)

の円を4階建てとした。³²⁾

以上の説明からわかるように、リッターは、ライプツィヒには珍しく起伏のあるレスニヒの土地形状を生かし、その魅力を高めるジードルンクを提案した。丘の頂部を中心点として3つの円環を描く。その際、住棟は等高線に沿って、中心の円から外の円に移るにつれ、低い位置に建てられていく。そのコンセプトを示すように、ルントリンクの配置図には等高線が記されている(図8)(ただし実際には正確に等高線に沿って住棟が建つわけではない)。中央の円環のみ住棟の高さを4階建てと一段高くすることで、土地の高まりはさらに強調される。それと同時に住棟を円形に配置することで、道路の建設費が抑えられるという経済性も主張し、円環のジードルンクというアイデアを補強した。

その一方で、竣工記事の最後でリッターは、「円形の建築の美的効果は、そのファサード造形が非常にシンプルであるにもかかわらず、好ましく、魅力的である。中央の円形広場は現在すでに強い印象を与えるものであり、それぞれの円環住棟や住居からの眺めは変化に富むものとなっている³³⁾」とも述べている。道路の建設費など経済的な面について言及する一方で、湾曲する住棟が生み出す景観的魅力に対する美的なこだわりも垣間見られるのである。

なお、このように土地との関係、経済性、そして美的な根拠が述べられるのに対して、ネルディンガーが示唆した、

円で囲い込むことによってジードルンクという共同体の中心点を形成しようとする意識は、少なくともリッターの説明には表れない。

ジードルンク・ルントリンクを形成する24の住棟は以下の構成である。

一番内側の円環(以後、「内円」)は、もっとも標高の高い位置にあり、4階建ての4つの住棟から構成される(図9)。その外側の2つの円環を形成するのが3階建ての住棟群である。真ん中の2番目の円環(以後、「中円」)(図10)が12棟の住棟、もっとも外側の円環(以後、「外円」)(図11)が8棟の住棟から構成されている。外側の円環の西側に南北に延びるように配置された棟は、幹線道路からルントリンクに入るときの入口を形成する部分であり、そこが2階建てとなっている。この1階部分には店舗が収容された(図12)。

各住棟の外観は装飾を抑えた近代建築の造形である。それをリッターは、「住棟の外観は内部の構成に対応している。外壁は完全に内部から、居住の用途をもとに発展しており、簡素で、即物的で、明快である³⁴⁾」と述べている。ファサードは幾何学的なヴォリュームで構成され、壁面は化粧塗りで仕上げられている³⁵⁾。そこに変化をつけるのが窓や階段室、バルコニーの配置であり、それらは内部の間



図9 内円のNo. 23(右)と26の住棟(2016年3月撮影)



図11 外円のNo. 6(右)とNo. 5の住棟(中央奥)
中円のNo. 15の住棟(左)(2016年3月撮影)



図10 中円のNo. 11の住棟(2016年3月撮影)



図12 敷地西側に建つ店舗付き住棟(2016年3月撮影)

取りを表す点で、機能を直截的に表現するデザインなのである。

ルントリンクの住棟がそれまでのライブツィヒにおける一般的な住棟デザインと異なる点は、伝統的な勾配屋根ではなく陸屋根を採用している点である。陸屋根の採用については、市議会でも批判もあったとされるが、建設費が比較的安いという経済性が一つの決め手となって、陸屋根に決まったという³⁶⁾。なお、一番内側の4階建ての住棟には屋上階が設けられ、一部が屋上テラスとなっていた(図13)。陸屋根を導入し、屋上テラスを設ける点も、1920年代のジードルンクの一つの理想的な姿を追求したものであった。

一方で、住棟の構造は当時一般的な構法であった煉瓦の組積造を主体としていた。本節で参照しているリッターによる竣工記事には構造に関する言及はほとんどないが、1929年6月から8月に作成されたライブツィヒ市史料館所蔵のジードルンク・ルントリンクの仕様に関する説明文書には、「壁体は煉瓦によるものとし、隔壁は部分的にプレファブ式プレート(Plattenbauweise)で建設される」と書かれている³⁷⁾。部分的にコンクリートが利用された可能性もあるが、主要構造は煉瓦積みであった。また、天井の大部分は木製梁で構成されていた。

設備では、当初はジードルンク全体に暖房を供給する中央暖房方式が検討されたが、費用負担の面から断念され、各住戸にストーブ式の暖房が設けられた。また最初は共同洗濯棟を建設する予定であったが、こちらも実現せず、各戸に洗濯と乾燥のためのスペースを設けたとリッターは記す³⁸⁾。台所には石炭とガスを併用するコンロが備えられた³⁹⁾。

住棟間は道路もしくは芝生の空地となっている。空地には、洗濯物干し場が道路から見えない位置に配置され、子供の遊び場と大人用のベンチが複数用意されていた。中央の円形広場には、中心に子供の水遊び用の池が設けられ、周囲に植物が植えられるなど、住人の共用空間が計画されていた。

なお、このジードルンクは「ニーベルンゲン・ジードルンク」と呼ばれることもある。ジードルンク内の広場や通

りが、ドイツのニーベルンゲン伝説との関連で名付けられているためである。円環状の構造とライブツィヒ生まれの19世紀の作曲家リヒャルト・ヴァーグナーの楽劇「ニーベルンゲンの指輪」が結びつけられたのかもしれない。中央の広場はジークフリート広場、円環を東西に貫く道路はジークフリート通り、南北の道路はジークフリートの妻の名、クリームヒルト通りである。そして外円と中円の2つの円環の間を一周する環状道路はニーベルンゲンリンクと名付けられた。住棟の形は飾りのない即物的な近代建築の造形だが、このような名称によって歴史とのつながりを連想させる。スラブ民族の集落ルントリンクとの関係も含めて、歴史や土着性と近代性が同居する点が興味深い。

4. ルントリンクにおける住戸平面の考察

4-1. リッターによる住戸平面の説明

リッターの説明をもとにジードルンク・ルントリンクにおける住戸平面の計画を述べていく。

記事によれば、ルントリンクには約600戸⁴⁰⁾の住戸が収容される。それらはさまざまな家族構成に対応できる床面積の異なる住戸の組み合わせとなっていた。具体的な内訳は以下のとおりである。

- ・床面積 45～50 m²の最小住居 [2 部屋と台所付き居間 (Wohnküche)] : 72 戸
- ・床面積 54～75 m²の中規模住居 [3 部屋と台所] : 454 戸
- ・床面積 54～75 m²の中規模住居 [4 部屋と台所] : 59 戸
- ・床面積 78～80 m²の多子家庭用住居 [5 部屋と台所] : 24 戸

一つの住宅地に異なる規模の住戸を混在させることは、この時期のジードルンクの計画でしばしば行われていたものであり、さほどめずらしくない⁴¹⁾。住棟と住戸平面との関係で重要なのは次の説明である。

「円形の全体配置にもかかわらず、すべての住棟はその位置と方位に対応した平面を持ち、すべての部屋はそれぞれ別々の用途をもっている。北向きの部屋はできる限り避けられた。それが無理な場合は親の寝室を北向きに置くが、南側の部屋と接続させた。その他は寝室はできるだけ東に、居間は南か西に向けている。台所はたいいてい居間の隣に配置され、両者はドアか引き違い窓を介して結ばれる。すべての住居は廊下、浴室、便所、食物貯蔵室もしくは棚、バルコニーをもつ。⁴²⁾」

方位との関係をもとに、諸室の配置の指針を定めた上で、円弧形の住棟に対応する形で複数の(床面積の異なる)住戸平面を提案したというのである。

リッターはそうにして導き出された住戸平面の多様性を示すように、同じ竣工記事の中で4つの平面図を掲載している(図14)。他の雑誌記事⁴³⁾でも同じ4枚の図面が掲載されており、先行研究で紹介されるのもこの中に限られていることから、リッターが発表したのはこの4枚の図面に限定され则认为られる。これらはいずれも階段室を挟んで並ぶ2住戸を表現している。4枚の内3枚の図面



図13 屋上テラスをもつ内円の住棟 (No. 23)
(2016年3月撮影)

は、階段室を挟む左右の住戸の平面が軸対象となっており、左右が同一の間取りと見なせるが、図 14 右上の平面図のみ、階段室の左右で異なる住戸平面が配置されている。そのため、この 4 枚には計 5 種類の住戸平面タイプが表現されていることがわかる。

左右の住戸平面タイプが異なる図 14 右上の平面図が例示されているのには理由がある。階段室を挟むこの 2 住戸の内、右側は多子家庭用住戸であり、リッターは多くの子供が一つの階段室に集中しないように、敢えて多子家庭用住戸と中規模住戸が階段室を共有する組み合わせにしたと説明している⁴⁴⁾。他にも図 14 左上は最小規模の住戸であり、空間を節約するために居間にニッチ状の小さな台所 (Kochnische) が付属する間取りを例示している。つまりここで例示されたものは、計画された住戸平面の中でも特徴的な平面型を示すものと考えられる。

リッターは説明の中で次のようにも述べている。

「このライプツィヒのジードルンクの住居の中では、円の形状はまったく、もしくはほんのわずかな程度でしか現れない。個々の住棟の計画は、すでに強調したように、部屋がすべての場所において方位と対応するように配置されるべく、非常に入念かつ詳細になされた。にもかかわらずルントリンクの実現に際して、同時期ライプツィヒで実現

した平行配置の住棟と比較して、困難が生じたり多くの費用がかかることはなかった。⁴⁵⁾」

このように自信をもって語られた住戸の計画の実態はどのようなものであったか。続いてリッターがジードルンク・ルントリンクで計画した多様な住戸平面の実態を考察する。

4-2. ルントリンクの住戸平面の実態

ここでジードルンク・ルントリンクの三重の円環を構成する 24 の住棟に図 15 のように番号を与える。最も外側 (外円) の 8 棟は、No.3~10、中間 (中円) の 12 棟は No.11~22、内側 (内円) の 4 棟は、No.23~26 である。この番号は、ライプツィヒ市史料館所蔵図面に記されたそれぞれの住棟番号 (Gruppe III~XXVI) と対応している。No.1 と 2 が抜けているのは、史料館の図面では、外円の西側にある南北に伸びる店舗付住棟 (図 12) に Gruppe I, II が割り当てられているためである。本稿の主眼は、円環状の住棟と住戸平面との関係を考えることにあるため、ここでは Gruppe I, II は考察の対象外とする。

No.3 から No.26 の住棟はすべて、階段室をはさんで 2 住戸が左右に並ぶ、いわゆる階段室型の集合住宅の形式をとっており、各住棟には 2~8 つの階段室が設けられている。

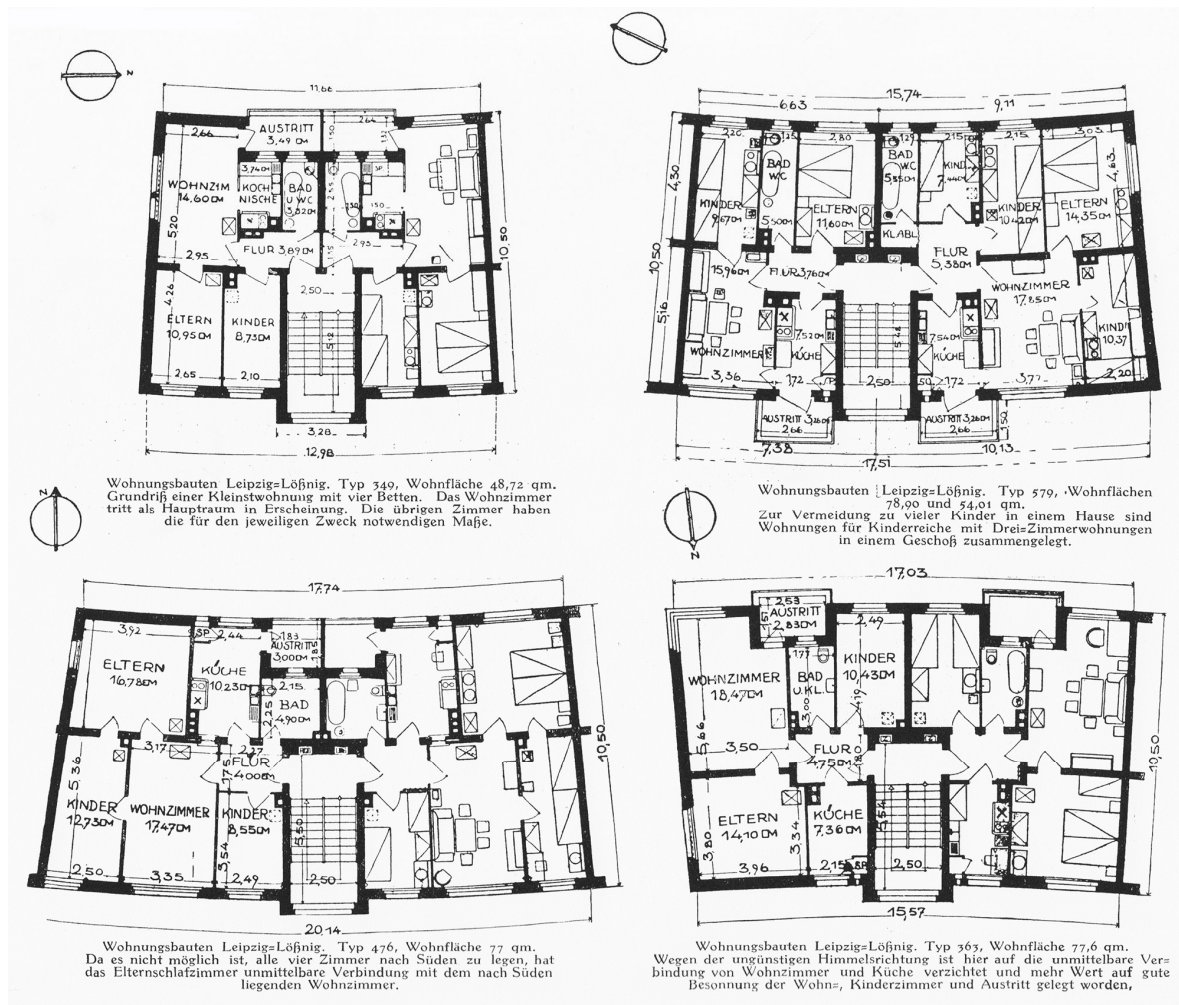


図 14 リッターが公表した 4 つの住戸平面図

各住戸は基本的に居間、親(寝)室、子供(寝)室、台所、浴室・便所、廊下、バルコニーから構成されている。

ルントリンクの設計図面には、「Typ 367」のような住戸タイプを示す記号がしばしば記されている。例えば、図 14 左上の住戸平面であれば「Typ 349」、図 14 左下は「Typ 476」と図面下のキャプションに記されている。この 3 桁の数字は、左が部屋数(居間と寝室の総数)を、続く 2 つの数字が床面積を表している。ゆえに、Typ 476 は、台所以外に 4 室をもつ 76 m²の住戸平面を示している。このタイプ名称は基本的に住戸の規模を表すものであり、住戸内の間取り(諸室の配置)までは明らかにしない。実際、ルントリンクでは同じタイプ名称が記されていても、部屋の配置が大きく異なるものがある。本来、住戸平面の特徴を示すためには、部屋数と床面積だけではなく、諸室の配置(部屋相互の関係性)も含めて説明すべきだが、この点については、リッターは竣工後の雑誌記事において先述した 4 つの代表的な平面を例示するにとどめ、すべての平面のヴァリエーションに関する説明は行っていない。

実際、ルントリンクのような円弧状の住棟を、居住環境を損なうことなく成り立たせるためには、リッター自身が述べているように、方位との関係を逐一考慮して、住戸平面を位置に応じて細かく変えていくことが必要となる。しかし、その結果として生まれる多様な平面型を明快に説明することは難しく、リッターは住戸平面計画の全容についての具体的な説明を避けたように思われる。

筆者がライプツィヒ市史料館所蔵の設計図面⁴⁰⁾をもとに、諸室の配置、バルコニー、階段室の位置関係(それらが円弧の内側にあるか外側にあるかも含めて)から住戸平面を分類したところ、16 の平面の型があることがわかった。それらに便宜的に(1)~(16)の番号を付し、それぞれの

住戸平面の特徴を表 1 にまとめた。また、ライプツィヒ市史料館所蔵図面をもとに筆者が作成した(1)~(16)の平面図を図 16 にまとめて示した⁴⁷⁾。

表 1 に示したように、外円に 4 タイプ、中円に 8 タイプ、内円に 4 タイプの住戸平面タイプが計画されていたことがわかった。

すべての住戸平面の基本的な特徴は、階段室から玄関に入ると、玄関ホールを兼ねた幅広の中廊下があり(中廊下ではなく、矩形的ホールとなる住戸平面もある)、それが居間に通じている。中廊下(もしくはホール)の両側には

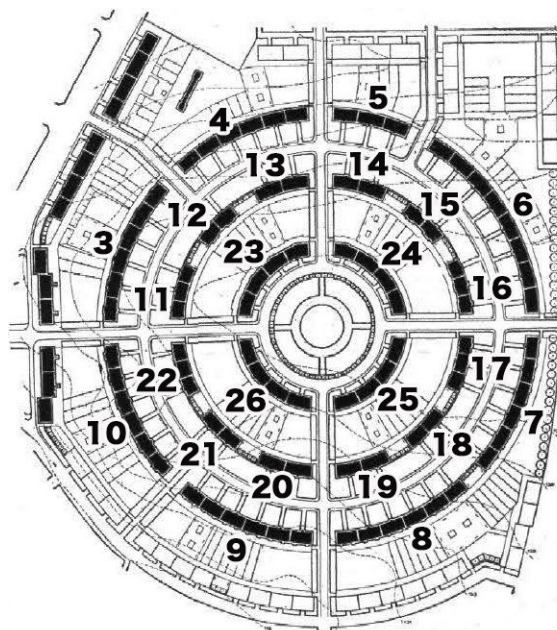


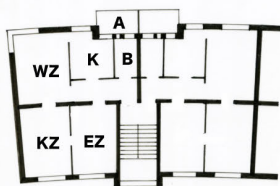
図 15 ルントリンクの配置図(北が上)と住棟 No.

表 1 ジードリンク・ルントリンクに計画された住戸平面タイプ

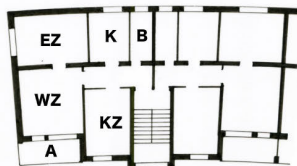
	平面No.	住棟No.	住戸数	標準の床面積	リッターによるタイプ名	外側	内側	バルコニー	階段室
外円	(1)	3, 10	72戸	約67m ²	Typ367	WZ, K, B	KZ, EZ	外側	内側
	(2)	4, 5	54戸	約68, 73m ²	Typ368, 373	EZ, K, B	WZ, KZ	内側	内側
	(3)	6	48戸	約73m ²	Typ373	EZ, B, KZ	WZ, K	内側	内側
	(4)	7, 8, 9	108戸	約63, 65m ²	Typ363?	WZ, K, KZ	EZ, K	外側	内側
中円	(5)	11, 22	36戸	約46m ²	Typ246	WK, B	KZ, EZ	外側	外側
	(6)	12, 15	12戸	約83m ²	Typ583A	EZ, KZ, KZ	KZ, WZ, K, B	内側	外側
	(7)	12, 15	12戸	約59m ²	Typ359	KZ, EZ	WZ, K, B	内側	外側
	(8)	13, 14	24戸	約76m ²	Typ476	EZ, K, B	WZ, KZ, KZ	内側	外側
	(9)	16, 17	36戸	約49m ²	Typ348	EZ, KZ	WZ, K, B	内側	外側
	(10)	18, 21	12戸	約79m ²	Typ579	KZ, WZ, K	EZ, KZ, KZ, B	外側	外側
	(11)	18, 21	12戸	約54m ²	Typ354	WZ, K	KZ, B, EZ	外側	外側
	(12)	19, 20	24戸	約76m ²	Typ476	KZ, WZ, KZ	EZ, K, B	内側	外側
内円	(13)	23南, 26北	32戸	約65, 68, 72m ²	Typ365, 368, 371	WZ, K, B	KZ, EZ	外側	内側
	(14)	23北, 24	48戸	約67, 68, 72m ²	Typ367, 368, 371	EZ, K, B	WZ, KZ	外側	内側
	(15)	25北	16戸	約67m ²	Typ366, 367	EZ, KZ, B	WZ, K	外側	内側
	(16)	25南, 26南	32戸	約66m ²	Typ366, 367	WZ, KZ, B	EZ, K	外側	内側

表 1 に関する注：

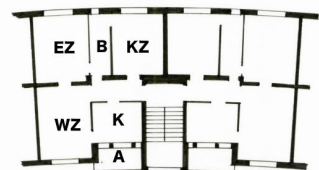
- ・「住棟 No.」はそれぞれの住戸平面タイプがどの住棟に計画されたかを表している。例えば「23 南」は 23 番住棟の南側半分を意味する。
- ・床面積については、図面上の記載方法がさまざまであり、住戸によって差があるため、目安の数値を記入した。面積はバルコニーも含む。
- ・「外側」「内側」の欄に記載された記号は、WZ=居間(Wohnzimmer)、EZ=親(寝)室(Eltern(schlaf)zimmer)、KZ=子供(寝)室(Kinder(schlaf)zimmer)、K=台所(Küche)、WK=台所付居間(Wohnküche, No.(5)のみ)、B=浴室・便所(Bad)を表す。それぞれの部屋が円弧の外側・内側のどちらに配置されているかを示している。記号の順番は、階段室から離れた側からの部屋の並び順を表す。同様に「バルコニー」「階段室」が円弧の「外側」か「内側」かも示した。



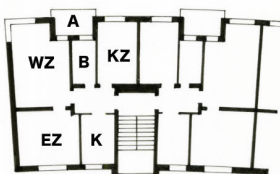
平面 No. (1) (住棟 3, 10)



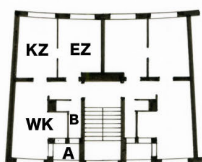
平面 No. (2) (住棟 4, 5)



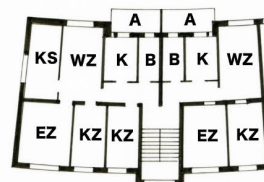
平面 No. (3) (住棟 6)



平面 No. (4) (住棟 7, 8, 9)

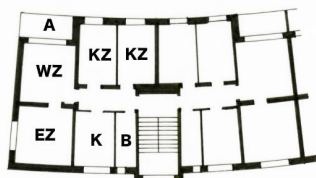


平面 No. (5) (住棟 11, 12)

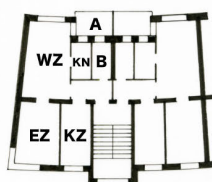


平面 No. (6) (左) (住棟 12, 15)

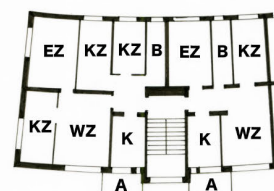
平面 No. (7) (右) (住棟 12, 15)



平面 No. (8) (住棟 13, 14)

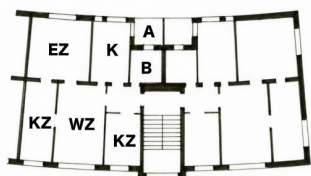


平面 No. (9) (住棟 16, 17)

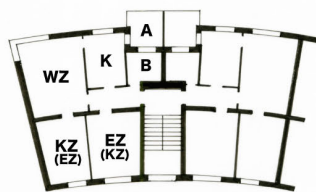


平面 No. (10) (左) (住棟 18, 21)

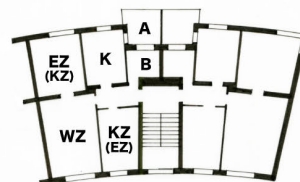
平面 No. (11) (右) (住棟 18, 21)



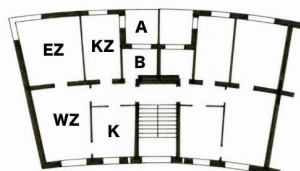
平面 No. (12) (住棟 19, 20)



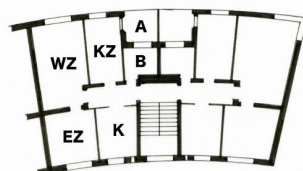
平面 No. (13) (住棟 23 南, 26 北)



平面 No. (14) (住棟 23 北, 24)



平面 No. (15) (住棟 25 北)



平面 No. (16) (住棟 25 南, 26 南)

図 16 ジードリンク・ルントリンクの 24 住棟に計画された 16 種類の住戸平面

- ・ 図中の記号：WZ=居間(Wohnzimmer)、EZ=親(寝)室(Eltern(schlaf)zimmer)、KZ=子供(寝)室(Kinder(schlaf)zimmer)、K=台所(Küche)、WK=台所付居間(Wohnküche)、KN=ニッチ状台所(Kochnische)、B=浴室・便所(Bad)、A=バルコニー(Austritt)
- ・ 平面 No. (13)、(14)については、原図に室名が記載されていなかったため、部屋の規模等から推定して室名を記した。
- ・ 住棟 No. 24 の南半分の住戸は、バルコニーが突出しない形式であったが、間取りが同じため、タイプを分けず、平面 No. (14)に含めた。

親・子の部屋(寝室)や台所、浴室が、その住戸が置かれる位置と方位との関係でそれぞれ配置されている。すべての住戸平面において、寝室の内の少なくとも一室は居間から入る構成になっているが、居間のさらに奥に寝室を設けて、居間から2つの寝室にアクセスする場合もある。親寝室が居間から入る例が多く、プライバシーの点ではやや不便さも感じられるが、リッターが言うように日照に対して居間と子供室を優先した結果と考えられる。いずれにしても、住戸の規模と、住戸が置かれる向きに応じて変化のある16種類の間取りが作り出されている。

階段室は、外円では円の内側、中円では円の外側に設置されている。これは外円と中円の間に道路(ニーベルンゲンリンク)があり、道路側に住棟への入口を設けた結果である(図11)。他方、内円は円の内側、すなわち中央の円形広場であるジークフリート広場に面する側にすべての住棟の階段室と玄関が設けられている(図9)。

一方でバルコニーの配置は複雑である。外円と中円では、バルコニーを円弧の外側に配置する住棟と、円弧の内側に配置する住棟が混在している。外円(住棟No.3~10)ではバルコニーが南面するように、基本的にその北半分の住棟では円の内側に、南半分の住棟では円の外側にバルコニーを設置しているが、西北西にあるNo.3の住棟のみ例外的にバルコニーが西(西北)向きとなる。中円(住棟No.11~22)も同様に、基本は南向きにバルコニーを配置するが、南北方向に伸びるNo.11、16、17、22の4棟はバルコニーが西側を向く計画となっている。ヴァイマル時代に数多く建設された平行配置型の住棟では一般に住棟を南北に伸ばし、西側に居間とバルコニーを置く計画となることから、それと同様の方法に従ったのだろう。なお、中円の南に位置するNo.19、20の住棟のみ、バルコニーは完全に北側に配置されている点が上記から見て異質である。

ただ、バルコニーが南や西に向けられたとしても、必ずしもすべての住戸でバルコニーが居間や寝室という主要な室と接続しているわけではない。居間からバルコニーにアクセスできる住戸は、外円と中円ではタイプ(2)、(4)、(5)、(8)、(9)の5つの住戸平面のみであった。住戸数から見ると、外円と中円に収容されている450戸の内の258戸であり、6割弱に過ぎない。その他はバルコニーが台所と接続しており、バルコニーの大部分が浴室に面しているものもある。この点はライプツィヒ市の住宅の歴史と関係があった。ライプツィヒの住宅史を論じた先行研究によれば、ライプツィヒの集合住宅では、バルコニーを台所と接続させるのが一般的であったという⁴⁸⁾。ルントリンクにおいて、16の住戸平面タイプの内、9タイプ(1)、(3)、(6)、(7)、(10)~(14)で台所からバルコニーに出る住戸平面が提案されているのも、おそらくライプツィヒの慣習的な住戸平面からの影響が考えられる。ただ一方で居住環境を重視したヴァイマル期のジードルンクにおいて、居住者が外気と接するバルコニーの設置は必須項目の一つであり、たとえばアレクサンダー・クラインのように、主要な居室である居間・食事室に住居の延長としてのバルコニーを設けること

を重視していた建築家もいる⁴⁹⁾。このような同時代の考え方もあり、リッターは約半数の住戸平面タイプでは、居間や寝室とバルコニーを接続させたと考えられる。しかしこの点については、方針が徹底されておらず、彼が円環状住棟との兼ね合いで住戸内のバルコニーの位置に苦心した様子がうかがえる。

バルコニーとの関係で興味深いのは内円(住棟No.23~26)である。ここでは全住戸で円の外側にバルコニーが設けられている。中央の円形広場側にはバルコニーを露出させず、広場側に統一感のある立面を作り出そうとした結果であろう。ハンブルクのヤレシュタットやベルリンのジードルンク・ブリッツでは、囲い込まれた広場側にバルコニーを配置するのが特徴であり、序章で述べたようにネルデインガーはそれを指して、共同体の一体感を表現するものと指摘した。ジードルンク・ルントリンクではそれと反対の計画が行われている点が興味深い。同一の簡素な立面単位が繰り返される点では、ルントリンクの中央広場側の立面は、共同体の場というよりはどこか匿名的で都市的な建築に近い印象を与える(図17)。バルコニーを円の外側に設けた結果、内円ではバルコニーが北に面する住戸が必然的に生じている。例えば、(14)の住戸平面では、バルコニーが北に置かれるため、居間とバルコニーはもっとも離れた位置関係になっている。

バルコニーは外面に現れるわかりやすい要素だが、それにも増して重要なのは住戸内の間取りである。そこでは、リッターによる前述の「位置と方位」を考慮した指針に従って、居間、親(寝)室、子供(寝)室、台所、浴室があたかもパズルのように様々な形で組み合わせられ、配置されている。リッターがもっとも苦労した点だろう。ただし、方角に応じて住戸平面を使い分けたとしても、住棟は少しずつカーブしていくので、同じ間取りでも円弧内の位置によって、住戸の面する方角は変わり、陽当たり等の条件は変わってきてしまう。仮に方位との関係で理想的な間取りが作り出せたとしても、円形の住棟を作ろうとする限り、場所による、日照をはじめとした居住環境の優劣は生じて



図17 内円の住棟の広場側立面(2014年1月撮影)

しまうのである。それはリッターがいかに苦心しても解消できない問題だったといえる。

住戸の規模に関しては、外円と内円は 63~73 m²の比較的規模の等しい住戸が収容されている。一方で中円は、46 m²の最小規模で2室のタイプ(5)から、83 m²の多子家庭用、5室のタイプ(6)まで幅広い住戸タイプが入っている。中円は長さが短い12住棟から構成されており、住棟ごとに性格を変えて、多様な住戸を収容する場所として位置づけられたと考えられる。

なお、筆者が分類した16の住戸平面の中には、(1)と(13)、(13)と(16)、(14)と(15)のように近い平面形をもつものもある。その点で、分類の基準によっては、より少ない平面数に分けることも可能である。だが一方でこの16の平面分類では床面積の違いは考慮していない。実際、(1)~(16)のほぼすべての平面タイプが床面積のわずかに異なるヴァリエーションをもっており、さらに角部屋か否かで開口部の位置や部屋の大きさが変わる例もある。それらの点も考慮すれば、このジードルンク全体で計画された住戸平面の数は30以上に上ると考えられる。それは効率性を重視したヴァイマル期ドイツのジードルンク計画の中では際立って多い住戸平面数といえるだろう。このような住戸平面の多様さの半面、ジードルンク全体は三重円という統一的な形態を示している。ルントリンクにおける住戸平面タイプの多様さは、円形という幾何学的で象徴的な住棟配置を実現するための多大な努力の結果だったのである。

4-3. 同時代のジードルンク計画の中でのルントリンクの特徴

ここまで論じてきたジードルンク・ルントリンクの住棟と住戸平面の特徴を、同時代の他のジードルンクと比較しつつ、考えてみたい。

3-3節で述べたように、リッターは当時一般に建設されていた平行配置型住棟(ツァイレンバウ)の対案として、敷地形状を生かした三重の円環の住棟を提案した。平行配置型住棟は、筆者が複数の論考で論じたように⁵⁰⁾、1920年代後半のドイツのジードルンクの建設で広く普及した住棟配置形式であった。代表的な実践者としては、ツェレを中心に活動したオットー・ヘスラーがいる。ヘスラーとグロピウスが全体計画を作成したカールスルーエのジードルンク・ダマーシュトック(1928-30)はこの時代の平行配置型住棟の代表例として注目を集めた。

平行配置型住棟がこの時代に普及した背景には、その合理的な性格があると考えられる。南北に伸びる住棟を十分な住棟間隔をとって平行に並べることで、すべての住戸に通風・採光面で良好な居住環境が効率よく提供される。すべての住戸の向きが同一であるため住戸平面は標準化でき、住棟の形がシンプルなため施工も効率的である。また、土地の無駄も少ない。これらの点から経済的にも優れた住棟配置形式だったことは疑いない。

このような利点は、特に1920年代末以降の経済状況の悪化に伴い、より重視されるようになる。例えばフランク

フルトで当初、ジードルンク・レーマーシュタット(1927-28)のように土地の形状を生かした変化のある住棟配置を試みていたエルンスト・マイは、1929-31年のジードルンク・ヴェストハウゼンでは平行配置型に特化した計画を実現させている。また、街区を囲う住棟形式が主流だったハンプルクにおいても、1920年代末には平行配置型が好まれるようになっていくことは、筆者が別稿で論じたとおりである⁵¹⁾。

このように平行配置型住棟には利点が多いが、欠点もある。それはリッターも指摘したように住棟配置の単調さであろう。同一の住棟が反復する様子は、上空から眺めれば機械をイメージさせるようなある種の近代的な美学が感じられるかもしれないが、地上に立つ人間の視点からは変化の乏しい単調な環境に映る。「それぞれの円環住棟や住居からの眺めは変化に富むものとなっている」と主張するリッターは、従来の平行配置型がもつジードルンク内の景観の単調さを克服したいと考えていたと思われる。

その一方で、リアネ・シャーフはジードルンク・ルントリンクの住棟に対して、「カーブしたツァイレンバウ(平行配置型住棟)⁵²⁾」という表現も使っている。三重の同心円の形で住棟が一定の間隔を取って並ぶルントリンクは、平行配置型住棟の対案というよりも、変形と見なせるという指摘である。確かにルントリンクを歩くと、場所によっては傾斜地に建ち並ぶ平行配置型の住棟のように見えることがある(図18)。一つの円環ではなく、円を重ねているところがルントリンクの特徴である。これは土地をできるだけ効率よく使うための工夫であり、その点では平行配置型と同じ目的をもっていったといえる。ただ、それを実現するために少なくとも16の住戸平面タイプが必要となったのは前節で見たとおりである。この点でルントリンクの計画には、合理性と、どこか非合理的ともいえる努力のせめぎ合いが見られるように思われる。実際、竣工後にジードルンク・ルントリンクを指して、「幾何学的な遊び」と断じた批評家もいたという⁵³⁾。



図18 ジークフリート通り西側から見るルントリンク
(2016年3月撮影)

一方で、そのような多大な努力をもとに成立したレントリンクの住棟と住戸平面の関係は、ネルディンガーも指摘するように、ヴァイマル期ドイツの中で希有なものであるのは確かである。ヴァイマル期にはレントリンクのように曲面を描く住棟が他にも存在する。すでに述べたようにタウトのジードルンク・ブリッツの馬蹄形住棟（図 3）はその代表例である。

タウトは、敷地に古くから残る池を取り囲むように、東側が開放された馬蹄形の住棟を計画した。各住戸の玄関と階段室は、道路がある馬蹄形の外周に配置され（図 19）、馬蹄形の内側には、各住戸の居間とバルコニーが面する構

成となっている（図 20）。この馬蹄形住棟は、全長約 350m と大規模なものだが、池を囲うように弧を描く部分は基本的に床面積 65 m² の図 21 の住戸で構成されており、住戸平面の標準化が行われている。例外として北・西・南の 3 箇所にある、馬蹄形の外側から中庭側へと通り抜ける通路の上の住戸のみ、95 m² の拡張した住戸平面となっている⁵⁴⁾。いずれにしても、すべての住戸は、馬蹄形の中心に正面を向けるように、居間とバルコニーを馬蹄形の内側に向けている。結果として、各住戸のバルコニーは、住棟内の位置に応じて、南、西、北の異なった方角を向くことになる。タウトのブリッツでは、リッターがレントリンクで行った、



図 19 ジードルンク・ブリッツ馬蹄形住棟の外周側
(2017 年 9 月撮影)



図 22 ジードルンク「アム・シュマーレン・ライン」
鳥瞰写真



図 20 ジードルンク・ブリッツ馬蹄形住棟の中庭側
(2017 年 9 月撮影)



図 23 ジードルンク「アム・シュマーレン・ライン」半円形
住棟の玄関側（円弧の内側）（2017 年 9 月撮影）

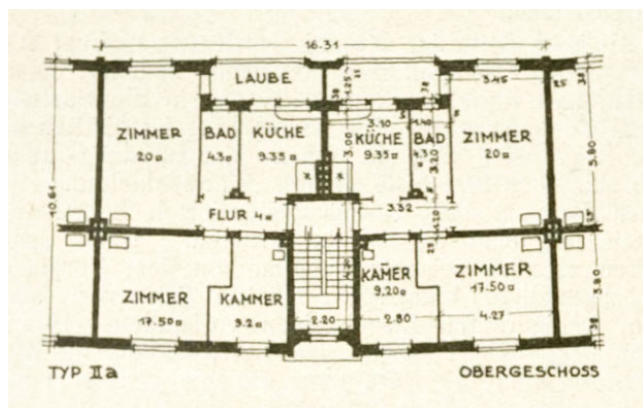


図 21 ジードルンク・ブリッツ馬蹄形住棟の住戸平面



図 24 ジードルンク「アム・シュマーレン・ライン」半円形
住棟の庭側（円弧の外側）（2017 年 9 月撮影）

住棟内の位置に応じて間取りを変える緻密な計画を断念して、建設における効率化が優先されたのである。

もう一つの例として、ドイツ中部テューリンゲン州の都市ゴータに建設された田園都市ジードルンク「アム・シュマーレン・ライン」(1927-28)を紹介したい⁵⁵⁾。このジードルンクは、ゴータ鉄道職員公益住宅建設協同組合の依頼を受けて、ゴータ在住の建築家ブルーノ・タメ、リヒャルト・ノイラント、ベルリンの政府建築家プフィッツマンの分担で設計された。化粧塗りされた色とりどりの住棟が並ぶ景観に特徴がある(図22)。勾配屋根や鎧戸のついた窓は郷土風の保守的なデザインだが、全般に装飾は少なく、簡素で立体幾何学的なヴォリュームで住棟が構成されている点は近代的である。また、大きな尖頭アーチのゲートや住棟の破風のデザインは表現主義も連想させる。このジードルンクの最奥に半円形に広場を囲む住棟がある(図23)。この住棟はテラスハウス式になっており、円弧の内側に玄関が置かれ、外周側にそれぞれの住戸の専用庭(図24)が伸びている。筆者はその中の一戸を見学する機会を得た。この住棟を見学して興味深かったのは、住戸と庭との関係である。半円形の住棟であるため、住棟内の住戸の位置によって、庭に日が射す時間帯が変わってくる。筆者を案内してくれた住人は、筆者に対して、自分の家は日差し強い昼間に庭が日影になるので都合がよいと話した。夕方に西日を浴びながら庭でワインを飲むのが幸せなの

だとも語った⁵⁶⁾。つまり、住棟内の住戸の位置によって、庭の用い方も変わってくるのである。この例やタウトの馬蹄形ジードルンクで見られる、場所による居住環境の違いは、湾曲した住棟でしばしば見られる特徴だろう。それに対してリッターのジードルンク・ルントリンクは、円環状という特殊な住棟配置を採用しながら、住戸平面計画を駆使してすべての住戸に日照面でできる限り差のない居住環境を与えようとしている。それは確かに一つの進歩を示す成果ではあるが、同時に計画の力で住まいをコントロールしようとしたこの時代の一つの傾向を示すもののようにも思われるのである。

ジードルンク・ルントリンクの住棟計画の特徴として、もう一点指摘したいのが、敷地形状との関係である。ルントリンクのように住棟計画を工夫して、傾斜のある敷地を積極的に生かそうとした大規模ジードルンクの例は、ヴァイマル期では他にはあまり見られない。筆者が訪れた中では、カッセルのジードルンク・ローテンブルク(オットー・ヘスラー設計、1929-31年)(図25)やシュトゥットガルトのヴァルマー・ジードルンク(リヒャルト・デッカー設計、1929-30年)、ライプツィヒ近郊の大ジードルンク・パート・デュレンベルク(アレクサンダー・クライン設計、1928-30年)など、傾斜のある土地にジードルンクを建設する例はいくつか見られたが、いずれも平行配置型のシンプルな住棟計画であった。また、戸建てを中心とした住宅地であれば、1927年にドイツ工作連盟がシュトゥットガルトに住居展として計画したヴァイセンホーフ・ジードルンク(図26)のように斜面地に変化のある配置計画を試みた有名な例もある⁵⁷⁾。対してルントリンクは、多層の集合住宅からなるジードルンクでありながら、傾斜地の特徴を生かしつつ平行配置型ではない新たな住棟配置を提案している。その点でルントリンクの計画は、ヴァイマル期ドイツの中では先駆的な試みの一つだったと考えられる。

5. おわりに

ジードルンク・ルントリンクは、1929-30年にフーベルト・リッターの設計でライプツィヒに建設されたジードルンクであった。傾斜のある敷地形状を生かすために、標高の高い地点を中心として、24棟の住棟が三重の円を形成する住棟配置に特徴があった。住棟は装飾を抑えた近代建築のデザインで、陸屋根を採用した点もライプツィヒでは新しかった。

このジードルンク内の住戸の計画に際してリッターは、様々な家族構成に対応する規模の異なる住戸を計画すると同時に、円環状の住棟において方位との関係を考慮した住戸平面を計画したと述べている。しかしその住戸平面計画の具体的内容について、彼は詳細には説明しておらず、先行研究でも詳しく語られることはなかった。本研究ではライプツィヒ市史料館所蔵図面を用いて、24棟の住棟で計画された住戸の平面を住戸内諸室、バルコニー、階段室の配置に注目して分類した。その結果、16の住戸平面タイ



図25 ジードルンク・ローテンブルク(2011年9月撮影)



図26 ヴァイセンホーフ・ジードルンク(2011年9月撮影)

ブが計画されていたことを明らかにした。それぞれの住戸平面にはさらに規模の異なるヴァリエーションがあることを考慮すれば、計画された住戸平面の数はさらに多いことが指摘できる。ジードルンク・ルントリンクは、全体が円環という統一感のある形状を示す半面、その中の住戸平面の計画は極めて多様であることがわかった。

このように一つのジードルンクの中で数多くの住戸平面を計画することは、効率性を重視したヴァイマル時代においては、類例のあまりないことであったと考えられる。湾曲する住棟自体は同時代のジードルンクでも見られるが、例えばブルーノ・タウトによるジードルンク・ブリッツの馬蹄形住棟では、標準化された住戸平面を採用し、住棟建設の効率性を優先している。そのような例と比べてみると、住棟と住戸平面の関係性に見られるルントリンクの入念な計画は、ヴァイマル期ドイツのジードルンクの中では特筆すべき試みだったといえる。

1929 年 1 月のライプツィヒ市議会において、リッターはジードルンク・ルントリンクの計画について次のような思いを述べたとされる。

「ライプツィヒでは他の都市と異なり、規模の大きいまとまったジードルンクはこれまで建てられなかった。しかしわれわれは、近代的なジードルンク建築のあらゆる観点が適用されるような、大きく模範的なジードルンクがライプツィヒに作られることを望んでいる。それがレスニヒで起こりうると考えている。⁵⁸⁾」

これがリッターの偽らざる気持ちだろう。ただし、その成果はとても個性的であったがゆえに、模範として追従例を生むことはなかったと思われる。明らかに言えることは、ジードルンク・ルントリンクの三重の円の構成は、ヴァイマル期ドイツにおけるもっとも特徴的な住棟配置の一つであり、それは少なくとも 16 の住戸平面の提案という多大な努力によって成し遂げられたということである。

最後にこのジードルンクの建設後の変遷について補足しておきたい。

1930 年 5 月 22 日、ライプツィヒの複数の地元紙でルントリンクの竣工が報じられている。「ライプツィヒ=レスニヒのルントリンクの住宅建築は市の建設方式の進歩を示している⁵⁹⁾」というように、おおむねこの個性的なジードルンクの成果を高く評価している。一方で、「差しあたり、ライプツィヒ市の最後の住宅建築」と副題に掲げる記事もあった⁶⁰⁾。これは、経済状況の悪化により市の住宅建設の見通しが立っていないことを憂いてのタイトルである。実際、1929 年の世界経済恐慌の影響により、ライプツィヒ市の住宅建設は大幅に縮小されていく。1930-31 年にジードルンク・ルントリンクの北側に建設された住棟は、完全な平行配置型となり、住戸は 40~50 m²の最小規模で、浴室もバルコニーもなかった⁶¹⁾。

第二次世界大戦中、ルントリンクは空襲を受けた⁶²⁾。一部の住棟が破壊されて撤去された結果、三重の円は一部が欠けた形で存続することになった。東ドイツ時代の 1965-

66 年に戦災を受けた住棟が部分的に再建されたものの、資金の欠如から建築の維持は十分になされず、荒廃した状況が続いたという。1980 年代には文化財保護のリストに載るが、修復の手が加えられることはなかった。しかし 1990 年の東西ドイツ統一が転機となる。ライプツィヒ住宅・建設会社により、1993 年から 1997 年にかけて文化財保護を考慮した全面的な修復が実施された。あわせて 1992-94 年には戦時下に破壊された 5 つの住棟⁶³⁾が再建された。

住棟の修復に際しては、建築の損傷の除去や構造的問題の解決がなされると同時に、当初の住戸平面を尊重しながら



図 27 ルントリンクの再建された外円の住棟 (No. 9)
(4 階が新たに設けられている) (2013 年 11 月撮影)



図 28 ルントリンクの再建された中円の住棟 (No. 13) (左)と
既存住棟 (No. 14) (右) (2013 年 11 月撮影)



図 29 ルントリンクの再建された中円の住棟 (No. 20, 21) の
間に設けられた地下駐車場への入口 (2013 年 11 月撮影)

ら、屋根階に追加の居室を設けるなど、新しい時代への適応が慎重になされた⁶⁴⁾。また各住棟・住戸へのエネルギーの供給方法や設備の更新も行われている。再建された住棟では、既存の住棟のデザインにあわせつつ、居住階としての4階が追加された(図27)。そのため最上層の窓の形によって既存住棟と再建住棟を見分けることができる(図28)。後者では上層の住戸にメゾネット形式も採り入れられたという。また、南側の新築住棟の地下には101台分の駐車場が設けられている⁶⁵⁾(図29)。

ドイツ再統一後、改修と再建によって再び三重の円に戻ったルントリンクは、時代の変化を受けいれながら、ヴァイマル時代の建築家の理想を今に伝えている。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 15K06408 基盤研究(C)「ヴァイマル期ジードルンクを糸口としたモダニズム住宅の国際性と地域性に関する研究」(研究代表者:海老澤模奈人、2015~17年度)の成果の一部です。本稿執筆にあたり、ライプツィヒ市史料館およびミュンヘン工科大学建築博物館史料室(Hubert Ritter 関連資料を所蔵)で資料の閲覧と収集を行いました。特に資料収集に際して便宜を図っていただいたミュンヘン工科大学名誉教授の Prof. Dr. Winfried Nerdinger (TUM Emeritus of Excellence) と同大建築博物館史料室担当の Dr. Anja Schmidt に感謝します。

注

- 1) ヤレシュタットに関しては、拙稿「ハンブルクのヤレシュタットの建築的特徴。ヴァイマル期ドイツのジードルンクにおける地域性の一考察」『東京工芸大学工学部紀要』Vol.30, No.1, 2017年12月、pp.61-78を参照。
- 2) Winfried Nerdinger, “Großmarkthalle und Rundling – Hubert Ritters Hauptwerke und ihre Stellung in der Architektur der 20er Jahre”, in : Sächsisches Staatsministerium des Innern (Hrsg.), *Hubert Ritter und die Baukunst der zwanziger Jahre in Leipzig*, Dresden, 1993, pp.42-44, 該当箇所は p.44
- 3) Gert Kähler, “Nicht nur Neues Bauen!”, in : Gert Kähler (Hrsg.), *Geschichte des Wohnens, Band 4: 1918-1945, Reform, Reaktion, Zerstörung*, DVA, 1996, pp.303-452, 該当箇所は p.371
- 4) Nerdinger, op.cit., p.44
- 5) Liane Scharff, “Die Siedlung “Rundling” – Kommunalen Wohnungsbau im Leipzig der Weimarer Republik”, in : Christiane Wolf (Hrsg.), *Das “Land in der Mitte”*, Magdeburg, 2004, pp.169-184
- 6) Ibid., p.180
- 7) 本稿は、拙稿「フーベルト・リッターのジードルンク・ルントリンクにおける住戸平面タイプについて」(『2016年度日本建築学会大会(九州)学術講演梗概集(建築歴史・意匠)』2016年8月、pp.783-784)に新たな考察を加え、大幅に加筆・修正したものである。
- 8) これまでの主な成果として、注1の論文の他に、拙稿「オ

ットー・ヘスラーのジードルンク・ブルームレーガー・フエルトにおける最小限住居の成立と変遷」『日本建築学会計画系論文集』No.696, 2014年2月、pp.525-533、「フランクフルトにおけるエルンスト・マイの住居形式の展開と最小住居への取り組み」『日本建築学会計画系論文集』No.700, 2014年6月、pp.1423-1431、「1920年代後半ヴァルター・グロピウスのジードルンクにおける水平連続窓の展開。ジードルンク・デッサウ=テルテンとダマーシュトックの比較を通して」『日本建築学会計画系論文集』No.701, 2014年7月、pp.1701-1709、「アレクサンダー・クラインと大ジードルンクバート・デュレンベルク:ヴァイマル期ドイツにおける住戸平面研究とその実践例」『東京工芸大学工学部紀要』Vol.41, No.1, 2018年6月、pp.27-44がある。

- 9) フーベルト・リッターについては、1992年9月にライプツィヒで研究集会が開催され、その成果をもとに論文集(Sächsisches Staatsministerium des Innern (Hrsg.), *Hubert Ritter und die Baukunst der zwanziger Jahre in Leipzig (Schriftenreihe für Baukultur, Architektur, Denkmalpflege: Reihe A – Monographien: Band 1)*, Dresden, 1993)が出版されている。リッターの生涯については、特記なき場合、同書に寄稿された彼の息子ハンス・リッターの論文 Hans Ritter, “Biographische Skizze zum Leben und Schaffen von Dr. Ing. Hubert Ritter”, *ibid.*, pp.8-16を参照した。
- 10) F.シューマッハーについては、拙稿(注1), 2017年12月を参照。
- 11) Stadtbaurat H. Ritter, “Zweckmäßige Formen der Citybuilding”, in: Stadtbaurat H. Ritter (Hrsg.), *Wohnung • Wirtschaft • Gestaltung: Ein Querschnitt durch die Leipziger Siedlungswoche März 1927 und den anschließenden Lehrgang über das Deutsche Siedlungswesen in Stadt und Land*, Berlin • Leipzig • Wien, 1928, pp.236-245, 該当箇所は p.237
- 12) Peter Leonhardt, ““Das Alte und das Neue im Leipziger Stadtkörper” - Der Generalbebauungsplan von 1929”, in: Sächsisches Staatsministerium des Innern (Hrsg.), *op.cit.*, pp.16-25, 該当箇所は p.23
- 13) Stadtbaurat H. Ritter, “Der Wohnungsbau in Leipzig”, in: Stadtbaurat H. Ritter (Hrsg.), *op.cit.*, pp.51-73
- 14) 例えば、ロイチュ(Leutzsch)にライプツィヒ市が建設した実験ジードルンクでは、外見が同じ住棟に対して異なる構造を用いる試みがなされたという(Pro Leipzig e.V. und Leipziger Wohnungs- und Baugesellschaft mbH (Hrsg.), “*Eine Wohnung für alle*”: *Geschichte des kommunalen Wohnungsbaus in Leipzig 1900-2000*, Leipzig, 2000, p.78)。また、リッター自身もジードルンク週間の講演録でいくつかの構造的実験について記している(Stadtbaurat H. Ritter, *op.cit.*, p.57)。
- 15) Dieter Schiffezyk, “Die Bauten des Gesundheitswesens und des Sportes von Hubert Ritter”, in: Sächsisches Staatsministerium des Innern (Hrsg.), *op.cit.*, pp.34-38
- 16) Hans Ritter, *op.cit.*, p.13
- 17) Wolfgang Hocquél, *Leipzig Architektur von der Romantik bis zur Gegenwart*, Leipzig, 2010 (3.Aufl.), p.23

- 18) Christoph Kühn, “...eine zweckmäßige Veteilung der Bevölkerungsmassen in bezug auf Wohndichte und Wohnqualität...”: Stadtplanung und Wohnungsbau von 1900 bis 1918”, in: Pro Leipzig e.V. und Leipziger Wohnungs- und Baugesellschaft mbH (Hrsg.), op.cit., pp.23-35, 該当箇所は p.35
- 19) L.シャーフによれば、両大戦間期ライプツィヒの住宅建設（新築）では、市が最大の施主であり、全体の約 40%を占めていた。続いて建設協同組合（Baugenossenschaften）が全体の 3 分の 1 ほどを建設した。残りは私企業によるものであった（Scharff, op.cit., p.169）。
- 20) Peter Leonhardt, *Moderne in Leipzig: Architektur und Städtebau 1918-1933*, Leipzig, 2007, p.45
- 21) 「一家族用住宅（Einfamilienhaus）」は、一戸建て住宅やテラスハウス式住宅など、各住居が外部からの入口を個別にもつ独立性の高い住宅のタイプを表す言葉で、ドイツの住宅建築ではよく用いられる言葉である。
- 22) Wolfgang Hocquél, “Stadtbaurat Hubert Ritter und die Baukunst der zwanziger Jahre in Leipzig”, in : Sächsisches Staatsministerium des Innern (Hrsg.), op.cit., pp.6-7, 該当箇所は p.6
- 23) Peter Leonhardt, “Die Kommunalarchitektur der Handelsstadt: Planen und Bauen in Leipzig unter Hugo Licht und Hubert Ritter”, in : Markus Jager, Wolfgang Sonne (Hg.), *Großstadt gestalten. Stadtbaumeister in Deutschland*, Berlin, 2015, pp.58-83, 該当箇所は p.80。
- 24) ジードルンク・ルントリンク成立の概要については、主に Scharff, op.cit.を参考にした。
- 25) Wolfgang Hocquél, *Leipzig Architektur von der Romantik bis zur Gegenwart* (注 17) , p.23
- 26) Hans Ritter, op.cit., p.11
- 27) Nerdinger, op.cit., p.44
- 28) Scharff, op.cit., p.177
- 29) Stadtbaurat H. Ritter, “Der “Rundling”, eine neue Siedlung in Leipzig-Lößnig”, in : *Bauamt und Gemeindebau*, 1930, pp.397-400, 該当箇所は p.397
- 30) 長谷川章『ブルーノ・タウト研究 - ロマン主義から表現主義へ』ブリュッケ、2017, p.77-97
- 31) 以下は注 29 に示したリッターによる竣工時の記述をもとにまとめた。なお同じ文章が、*Leipzig* 誌の 1930 年 8 月号 pp.63-65 にも掲載されている。
- 32) Stadtbaurat H. Ritter, op.cit., p.397
- 33) Ibid., p.400。この引用文の中で「円環住棟」は「Ringe」の訳である。Ringe は円環道路を指す可能性もあるが、複数形のため円環住棟と訳した。
- 34) Ibid., p.399
- 35) 現在は黄土色の単色で塗られている。当初もおそらく同じ色と思われるが、白黒写真のため判別できず、資料にもその記載がない。
- 36) Scharff, op.cit., pp.171-172
- 37) 以下のライプツィヒ市史料館所蔵資料：「WFA Nr.285 Bl.053:内円住棟についての説明(1929 年 6 月 14 日)」「WFA Nr.272 Bl.050:中円住棟についての説明(1929 年 6 月 28 日)」
- 「WFA Nr.268 Bl.021 : 外円住棟についての説明(1929 年 8 月 9 日)」。この仕様書は建設前のものであって、変更されている点もあるため、プレファブ式のコンクリートプレートが実際にどの程度用いられたかはわからない。
- 38) Stadtbaurat H. Ritter, op.cit., p.398。なお、前出（注 37）のライプツィヒ市史料館所蔵資料によれば、「Dürstraße 沿いにジードルンクのための中央洗濯棟が建設されるため、住棟には洗濯室がない」と記されている。おそらくこの後に、洗濯棟の計画が頓挫したのだろう。
- 39) 浴室は浴槽と石炭ストーブの設置を標準とするが、最小規模の住居の半数では、面積の節約のために、浴槽の代わりにガス湯沸かし器を備えたシャワーを設置していると記されている（Ibid., p.398）。
- 40) リッターが記事で列挙した住戸数を足すと 609 戸となる。だが 3 つの円環の 24 住棟に入る住戸数は、表 1 に示したように 578 戸である。両者の差は、円環住棟の西側にある店舗付き住棟の住戸数と考えられる。
- 41) 例えば、筆者が別稿で論じたアレクサンダー・クライン設計の大ジードルンク・バート・デュレンベルク（1928-30）など（拙稿（注 8），2018 年 6 月 参照）。
- 42) Stadtbaurat H. Ritter, op.cit., p.398
- 43) W.H.(W.Hegemann), “Siedlung Rundling in Leipzig-Lössnig”, in: *Wasmuths Monatshefte für Architektur und Städtebau*, 1930, pp.338-339
- 44) Stadtbaurat H. Ritter, op.cit., p.398
- 45) Ibid., p.400
- 46) ライプツィヒ市史料館（Stadtarchiv Leipzig）所蔵資料：WFA Nr.264～Nr.288
- 47) ライプツィヒ市史料館所蔵の一部を撮影依頼し、デジタルデータとして住棟平面図を入手した。それをもとに、平面タイプ(1)～(16)の住戸平面単位をほぼ同一の縮尺でトレースし、図 16 の平面図一覧を作成した。作図の元にしたのは、各住棟の Obergeschoß（上階：2～4 階）の平面図であるが、Obergeschoß の図面が不鮮明な場合は、Erdgeschoß（1 階）の図面を使用している。ただ、1 階と上階でもともと住戸の規模が少し違う場合があり、また同じ住棟の中でも、間取りは同じであっても住戸の位置によって部屋の大きさが異なることがある。そのため図 16 の平面図は、規模については必ずしも厳密なものではない。それぞれの間取りの特徴を示す図として参照されたい。なお、原図は複数の人物によって作図されたようで、住棟によって表現方法が異なっている。
- 48) Kunibert Jung, “...Serienbau (...) innerhalb alter Bebauungspläne...” Von der Gründung der Weimarer Republik bis zum Ende des Zweiten Weltkrieges”, in : Pro Leipzig e.V. und Leipziger Wohnungs- und Baugesellschaft mbH (Hrsg.), op.cit., pp.38-77, 該当箇所は p.63
- 49) 拙稿（注 8），2018 年 6 月, p.30
- 50) 例えば、拙稿（注 8），2014 年 2 月および拙稿（注 8），2018 年 6 月
- 51) 拙稿（注 1），2017 年 12 月

52) Scharff, op.cit., p.174

53) Otto Völckers が 1932 年の著作『住宅建設読本 (Wohnbaufibel)』で、次のように評している。「幾何学的な遊びが、住宅建築において何も作り出さず、住居を損なっている。ひどい平面は、非常にモダンなファサードや陸屋根、色とりどりのリノリウムを用いても良くなることはない。時代遅れの平面には、煉瓦による古い建設方法や木製梁、勾配屋根の方があっている。」(Scharff, op.cit., p.183 の引用を参照)

54) Ben Buschfeld, *Bruno Tauts Hufeisensiedlung*, Berlin, 2015, p.46 など。ブリッツのカーブした住棟における標準化された住戸 (図 21) は、2 つの部屋 (Zimmer) と 1 つの小室 (Kammer) をもつ 2+1/2 室の平面である。馬蹄形住棟の東側の直線部分と角部の住戸はそれより規模が大きい平面型 (3 室もしくは 4 室) であるが、いずれもバルコニーを馬蹄形の内側に向けている点は共通している (“Die Großsiedlung Britz in Berlin-Neukölln”, in : *Deutsche Bauzeitung*, Berlin, 1927, pp.809-815 の平面図より)。

55) Gartenstadtsiedlung “Am Schmalen Rain”。ジードルンクの概要については、Stadt Gotha, Stadtplanungsamt (Hrsg.), *Gotha. 20 Jahre Altstadtsanierung*, Gotha, 2011, pp.80-89 を参照。

56) 2017 年 9 月 3 日にこのジードルンクを訪問し、写真を撮っていた筆者を住人の一人が家に招き入れてくれた。その時の会話に基づいている。このジードルンクはもともと鉄道職員用のジードルンクであったが、現在は鉄道職員以外にも入居している (この住人も鉄道関係者ではない)。ただし、居住のためには協同組合 (Genossenschaft) に入会しなければならず、居住費は家賃 (Hausmiete) ではなく、居住料金 (Wohngebühr) の名目で支払うという。この半円形住棟の各戸の庭のすぐ先には鉄道の線路が走っている。この半円形住棟の住戸平面図を入手することはできなかったが、外観等から判断する限り、おそらくジードルンク・ブリッツと同様に標準化された平面を採用し、方位に応じた特別な配慮はなされていないと思われる。

57) このジードルンクのためにミース・ファン・デル・ローエが模型を用いて効果的な住棟の配置計画を練っていたことが知られている (Matthias Schirren, “Städtebau als “bildende” Kunst. Der Werkbund und seine Siedlung”, in : *Deutscher Werkbund Berlin* (Hrsg.), *Bauen und Wohnen. Die Geschichte der Werkbundsiedlungen*, Tübingen, 2016, pp.7-25)。なおヴァイセンホーフを先例として各国の工作連盟が建設した実験的なジードルンクには、傾斜地に計画されたものがいくつか見られる。敷地への対応も実験的なジードルンクの性格を体現する一つの要素だったのかもしれない。例えばチェコ工作連盟がプラハに建設したジードルンクである「ババ」(1932) も見晴らしい丘の上に建つが、ヴァイセンホーフと同様に戸建て住宅による住宅地である。一方で、スイスのチューリヒに建設された工作連盟ジードルンク・ノイビュール (1931) はチューリヒ湖を見下ろす高台の斜面地の特性を生かした出色のジードルンクである。全体は平行配置型住棟によるオーソドックスな計

画だが、斜面に直交するように伸びるテラスハウス式住棟では、住棟のヴォリュームを階段状に変化させ、バルコニーや庭からチューリヒの街が望める計画となっている。居住環境の優れたジードルンクが傾斜地に作られている。

58) Scharff, op.cit., p.183 の引用を参照。

59) “Der Rundling in Leipzig-Lößnig”, *Leipziger Neueste Nachrichten*, 1930.5.22

60) “Der “Rundling” in Leipzig=Lößnig: Bis auf weiteres die letzten Wohnbauten der Stadt Leipzig”, *Neue Leipziger Zeitung*, 1930.5.22

61) Scharff, op.cit., p.177 および Pro Leipzig e.V. und Leipziger Wohnungs- und Baugesellschaft mbH (Hrsg.), op.cit., p.247。L. シャープによれば、この最小規模の住居は、1930 年に国が策定した住宅建設緊急プログラムにおける「簡素な住居 (Schlichtwohnung)」のための助成金を用いて建設されたという。対象は 50 m² 以下の最小規模の住居だった。

62) この段落は主に、Sächsisches Staatsministerium des Innern (Hrsg.), *Denkmalschutz und Denkmalpflege im Freistaat Sachsen*, Dresden, 2011, p.25 および Christian Geinitz, “Der “Rundling” in Leipzig: Das Fadenkreuz der Moderne”, *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 2009.8.30 を参照。

63) ミュンヘン工科大学建築博物館史料室所蔵のフーベルト・リッター関連史料にある「Sanierungskonzept der Siedlung Rundling Leipzig-Lößnig」と題する資料 (作成年不明) によれば、戦時下で破壊され、1990 年代に再建された住棟は、No.4, 9, 13, 20, 21 の 5 棟であった。

64) Jörg Böhning, “Siedlung Rundling in Leipzig-Lössnig: Instandsetzung, Modernisierung und behutsame Ergänzung eines Wohngebietes aus den 20er Jahren”, in *Bundesbaublatt*, November 1991, pp.734-740

65) “Es geht los am Rundling”, *Leipziger Volkszeitung*, 1992.10.6。同記事によれば、新築の 5 棟には計 122 戸が収容された。

図版出典

図 1, 8, 14 : *Bau und Gemeindebau*, 1930, pp.397-398

図 2 : F. Schumacher, *Das Werden einer Wohnstadt*, Hamburg, 1932

図 3, 21 : *Deutsche Bauzeitung*, 1927, pp.810-811

図 4, 5 : Sächsisches Staatsministerium des Innern (Hrsg.), *Hubert Ritter und die Baukunst der zwanziger Jahre in Leipzig*, Dresden, 1993, p.74, 114

図 6, 9, 10~13, 17~20, 23~29 : 筆者撮影

図 7 : M.Jäger, W.Sonne (Hrsg.), *Großstadt gestalten. Stadtbaumeister in Deutschland*, Berlin, 2015, p.80

図 15 : *Bau und Gemeindebau*, 1930, pp.398 の図に筆者加筆

図 16 : 筆者作成

図 22 : Stadt Gotha, Stadtplanungsamt (Hrsg.), *Gotha. 20 Jahre Altstadtsanierung*, Gotha, 2011, p.83